

子供の暮らしの変遷

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-04-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.24517/00050437 |

7. 子供の暮らしの変遷

宮越 清圭

1. はじめに
2. 学校の統廃合について
3. 七浦小学校について
4. 昔の子供の遊び
5. 昔の子供の暮らし
6. 現在の子供の暮らし
7. 考察
8. おわりに

1. はじめに

今回の調査では輪島市門前町七浦地区にうかがった。住民の方々からたくさんのお話をきく中で、住民の方々が幼いころ、七浦地区ではどのような暮らしが行われていたのか、子供達はどのような一日を送っていたのかに対して関心を持つようになり、現在までの変化を明らかにしていきたいと思った。本章では、七浦地区の子供の暮らしについて、聞きとりで得られたことを主に記していく。またこのようなテーマを考える上で、学校の統廃合という問題は重要な論点であり、それについても文献を参考に述べていく。まず、学校というテーマについて述べ、次に子供の暮らしについて記していくこととする。

2. 学校の統廃合について

この節では、『七浦民俗誌』（1996: 159-171）に記載されている、学校の統廃合の問題について記していきたい。子供の暮らしの変遷を考えるにあたって、学校の統廃合は述べなければならない重要な要素であると考ええる。

2.1 統廃合の経緯

この本が発行された1996年では、教育委員会から次のような学校統廃合の案が提示されていた。

<小学校について>

平成7（1995）年 仁岸小学校、阿岸小学校 →松風台小学校に統合

平成8（1996）年 七浦小学校、浦上小学校、本郷小学校 →櫛比小学校に統合

<中学校について>

平成5（1993）年 門前中学校、剣地中学校、七浦中学校 →門前中学校に統合

また、1996年までは、以下のような統廃合が行われてきた。

昭和 41 (1966) 年 浦上中学校、本郷中学校、諸岡中学校、黒島中学校、門前中学校
→門前中学校に統合

昭和 46 (1971) 年 内保小学校、別所小学校 →本郷小学校に統合

昭和 50 (1975) 年 小山小学校、南小学校 →阿岸小学校に統合

昭和 54 (1979) 年 馬渡小学校、剣地小学校 →仁岸小学校に統合

昭和 62 (1987) 年 黒島小学校、諸岡小学校 →松風台小学校に統合

どの学校に関しても、行政側は統廃合問題に関する話し合いや会議を重ねることによって、住民の意見を賛成へ導いてきた。

七浦地区に関して、初めて学校の統廃合の話題が出たのは、1989 年頃であった。以後、教育委員会が主体となる形で、何回か地区住民との話し合いが持たれてきている(表 1 参照)。

表 1 統廃合問題に関する懇談会

| | 年 | 委員会名 | 参加人数 |
|---|-------------------|------------------|---------|
| 1 | 平成元 (1989) 年～3 年 | 地区懇談会、教育懇談会 | 20～30 名 |
| 2 | 平成 4 (1992) 年 2 月 | 教育フォーラム | |
| 3 | 5 月 | 学校統合問題検討委員会 | 60～70 名 |
| 4 | 7 月 | 第 2 回学校統合問題検討委員会 | |
| 5 | 10 月 | 地区懇談会 | |

出所: 『七浦民俗誌』(1996: 164)

1 の地区懇談会は主に、これからの統合に向けての地ならしとして行われたとのことである。ここでは、将来的な見通しとしての小学校の統合の他、社会教育、生涯教育、また、嫁不足に対処するための仲人の養成について、教育委員会から話があった。2 の教育フォーラムは七浦公民館で行われ、初めて統合に関する具体的な案が提示された。ここでは、地元住民の圧倒的な反対にあったという。3 の学校統合問題検討委員会では、地元住民との話し合いの場が持たれた。70 名程度の参加であったが、話し合いは平行線に終わった。4 でも、3 の時と同様に地区住民反対が多かった。5 は皆月で、最終的な話し合いとして行われたものだが、ここでも結局、合意には至らなかった。

2.2 学校統合の時に浮かんだ諸問題

ここでは、1996 年に考えられていた学校統合にあたって考えられた様々な問題を具体的に列挙していく。また、聞きとりで得た話も交えて記していく。

○教育上の問題点について

教育委員会側は、「小規模校は教育上の効果が低い」という見解を述べており、その根拠として、音楽や体育の授業がやりにくい、団体競技が 1 チームも作れない、好きな

クラブへ入れない、競争心がおおられず、のんびりし過ぎてしまうなどの点を挙げている。このように学習効果を論点とする教育委員会に対して住民側は、①小規模校でも教育効果は十分にあるので統合する積極的理由はない、②学校を統合してしまうと、子供達の素行が悪くなり、悪影響をもたらすという主にこの2点で反対意見を出した。

○同窓会を巡る問題について

七浦地区の同窓会は、100年を超える歴史を誇っている。生徒は、義務教育が終わるとともに新規加入となり、同窓会員として20年間会費を払い続ける。同窓会長は小学校の校長が、副会長は教頭が、それぞれ務めることになっている。他地域から赴任してきた場合も同様である。同窓会の主な仕事は、会誌『しつら』の編集・研修旅行・講演会・講習会であるが、1996年には会誌の編集が唯一の活動となっていた。活動は農閑期の冬場から春にかけて行われた。総会は1月と8月の2回であるが、15～80人しか集まらなかったという。

同窓会員は金沢・大阪・東京を初めとして全国に散らばっており、会誌『しつら』が会員の間をつないでいた。もちろん、七浦地区の人々も大半が同窓会に所属していた。小学校・中学校と続く9年間のうちに、生徒同士で知らぬ顔は一人としていなくなり、極めて密接な関係が形成されていたことは想像に難くない。同窓会は、この関係を会誌などの形で具体化することにより、人々に仲間意識を与え続けてきたと考えられる。

しかし、この同窓会誌『しつら』は七浦小学校が廃校となったことにより、廃刊となった。このことに関しては、七浦小学校で教員を務めていたRさんから話をうかがった。七浦小学校は、実際には2006年に廃校となり、その年に発刊された58号が同窓会誌『しつら』の最終号となったという。

○通学に関する問題について

学校が統合されると、七浦地区の子供達は、門前の学校に通うことになる。そこで当時出てきた問題は、通学に関する問題であった。

まず、交通費が問題となった。当時、七浦地区から門前までは往復千円であった。門前町側は、交通費に対しては8割負担という考えを提示していたが、それでも往復200円で、月額だと8千円の負担を父兄は新たに負うこととなる。そこで、スクールバスを運行させてほしいという希望が父兄から出たのだが、運転手は生徒たちを登校させた後は下校を待つだけになってしまい無駄が多い、また、赤字財政である「のと中央バス」(バス会社)を使ってほしい、ということで却下された。

また、通学時間も当時問題となっていた。皆月・門前間は、直線距離で6キロ以上あり、この頃バスでの所要時間は片道約30分であった。また、間に山を挟んでいたため、道は曲がりくねっており、道幅も狭い。冬場など、子供達がクラブ活動をして遅く帰ってくると外はもう暗く、結局、統合の1つの理由となっていたクラブ活動も自由にできなくなるという意見が出ていた。

このような事情から、当時、門前町では30億という予算をかけて「まがきふれあい

ロード」計画を立てた。これは「のと道路」の支線となるもので、完成すると、門前・皆月間を片道約 15 分で行き来できるようになるとされた。まず道路をつくり、その後、門前・皆月間の山を貫く 560 メートルのトンネルをつくるという予定を立てた。当時は、「30 億で、トンネルを作るというのは土台無理なことだ。」などと危惧されていたが、2016 年 3 月にトンネルは完成し、問題は解消されたと考えられる。F さん（皆月、男性、60 歳代後半）によると、子供の現在の通学状況に関して、保育所は親による送迎、小学校はスクールバス、中学校は路線バスを利用しているという。現在の通学状況については、他の方からも詳しくうかがえたので後述することとする。

○伝統芸能の継承について

毎年 8 月に行われている「お小夜まつり」では、子供達も「のと麦屋節」を踊る。1996 年時点では、小学校は、月曜の 6 限の時間を使い、地区の民謡保存会の指導で麦屋節の練習をしていた。学校が廃校ということになると、もうこの練習はできなくなるので、伝統芸能を継承していくことは大変困難になると危惧していた。

3. 七浦小学校について

この節では、『新修門前町史』（2006: 783-786）の記載や聞きとりをもとに、七浦小学校について詳しく記していく。

3.1 友好町村との交流学习

七浦地区暮坂出身の遊女「おさよ」が能登麦屋節を唄い伝えたという伝承が縁で、町と友好町村の交わりを結んでいる富山県上平村（現南砺市）から中学生が門前中学校を訪問し、同校生徒とスポーツなどの交流をしたのは 1984 年 8 月 20 日であった。以来、上平の小学校・中学校と、本町の門前・七浦中学校、七浦小学校との交流学习が続けられてきた。1993 年 7 月 27～28 日、上平小学校の 4 年生以上 28 人を七浦小学校に迎えた。七浦小学校も 4 年生以上の児童は 28 人であった。体育館で対面式が行われ、両校の児童代表があいさつをして校歌の交歓をした。当時七浦小学校教員であった R さんによると、この交流学习はゆとり教育の一環のようなもので、冬には七浦小学校も、上平小学校との交流のため現南砺市に向かい、五箇山で 2 泊のスキー学習をしたという。夏には、海に馴染みのない上平小学校の子供達が七浦地区を訪れ、海で遊んだ。具体的には、タイヤチューブと竹で作った「いかだ」で競争したり、ハマグリひろいなどを楽しみ、夜は「ロッジのと皆月」の広場で、バーベキューや花火大会、麦屋節踊りなどで楽しく過ごした。他には、両校児童が猿山灯台まで遠足したり海で遊んだ記念に「海藻えはがき」を作った。このように、夏は皆月の海で、冬は上平村のスキー場で、両校の楽しい交流学习は毎年続けられた。

3.2 七浦小学校の生徒数の推移

ここでは、七浦小学校同窓会（1999）のデータをもとに卒業生の人数の推移をみていく。表 2 からわかるように、昭和中期に人数が多く、一番多い年は 1962（昭和 37）年

で 77 名となっている。そこからは、平成にかけてだんだんと人数は減少していったことが分かる。

4. 昔の子供の遊び

前節まででは、学校の統廃合についてみてきたが、この節からは、子供の暮らしについて焦点を当てて述べていく。ここでは、かつての七浦地区での子供達の暮らしを見ていくうえで、まず「遊び」に焦点を当てていきたい。七浦地区に住む 50～80 歳代の方々が子供の頃どのような遊びをしていたかについて、聞きとりで得られた話を中心に述べていく。

4.1 昔の子供達の主な遊び

まず、80 歳代の方々からうかがった話を述べていく。S さん（餅田、女性、80 歳代）によれば、男の子も女の子も一緒に浜に行ってお花見をしていたそうだ。夏になれば海に毎日入っていた。以後紹介する方々の話でもよく海の話が出てきており、海に近い七浦地区の子供達にとって海は子供達の格好の遊び場であったことが聞きとりからよくうかがえた。また、M さん（皆月、女性、80 歳代）もまた、お花見・かくれんぼなどをしていたそうだ。これらは現代の子供達もよくする遊びであるが、この他に遊びの代表格のように感じる「だるまさんがころんだ」をしたことをあるのか尋ねると、したことないという答えだった。一方で一緒に話をうかがった M さんの息子さんである M₂ さん（皆月、男性、60 歳代前半）はしたことがあると述べていた。このようなことは、竹鉄砲、缶蹴りでもみられた。また、輪ころがしという遊びも、M さんと M₂ さんでは、転がす輪の材質が異なっていた。M さんは、桶のたがで作っていた一方で息子の M₂ さんの時代になると、たがではなく自転車の車輪の枠を使っていたそうだ。M さんの時代では他に、おはじき、ねんがら（ぱっちゃん）、あやとり、おままごと、おてだま、なわとび、竹のソリ・スキー、けんけんぱなどをしていたそうだ。特になわとびに関しては、七浦地区は漁師が多かったため、網がたくさんあったからさかんだつたと M₂ さんは語ってくれた。これらの遊びについては、詳しい話が他の方からもうかがえたので後述することとする。

4.2 正月での子供達の遊び

M さんから、正月には、近所の子供達が集まって特別な遊びをしたという話がうかがえた。その遊びというのは、子供達が薄い煎餅やカラフルなビスケットをそれぞれ 2 銭で 20 枚ずつ買って友達の家を集まってそれを持ち寄り、煎餅やビスケットを重ねたものに糸を通した針を突き刺し、その糸でとれた煎餅は自分のものとなり、その枚数を集まった子供達で競うというものであった。この遊びは、M₂ さんの時代にも行われていたそうだ。

表2 七浦小学校の年別卒業生数

| 卒業年 | 男 | 女 | 計 | 卒業年 | 男 | 女 | 計 |
|------|----------------|----|----|------|----|----|----|
| 明治31 | 2 | 0 | 2 | 昭和26 | 25 | 24 | 49 |
| 32 | 8 | 0 | 8 | 27 | 29 | 24 | 53 |
| 33 | 8 | 0 | 8 | 28 | 25 | 19 | 44 |
| 34 | 10 | 0 | 10 | 29 | 23 | 26 | 49 |
| 35 | 5 | 0 | 5 | 30 | 31 | 23 | 54 |
| 36 | 13 | 0 | 13 | 31 | 38 | 20 | 58 |
| 37 | 4 | 0 | 4 | 32 | 28 | 24 | 52 |
| 38 | 9 | 1 | 10 | 33 | 29 | 19 | 48 |
| 39 | 8 | 0 | 8 | 34 | 17 | 21 | 38 |
| 40 | 8 | 0 | 8 | 35 | 15 | 16 | 31 |
| 41 | 14 | 1 | 15 | 36 | 22 | 16 | 38 |
| 42 | 13 | 0 | 13 | 37 | 45 | 32 | 77 |
| 43 | 16 | 0 | 16 | 38 | 24 | 36 | 60 |
| 44 | 11 | 1 | 12 | 39 | 32 | 34 | 66 |
| 45 | 14 | 0 | 14 | 40 | 39 | 24 | 63 |
| 大正2 | 12 | 0 | 12 | 41 | 25 | 24 | 49 |
| 3 | 16 | 1 | 17 | 42 | 17 | 24 | 41 |
| 4 | 9 | 3 | 12 | 43 | 21 | 19 | 40 |
| 5 | 23 | 3 | 26 | 44 | 38 | 24 | 62 |
| 6 | 13 | 4 | 17 | 45 | 38 | 24 | 62 |
| 7 | 11 | 3 | 14 | 46 | 22 | 18 | 40 |
| 8 | 19 | 1 | 20 | 47 | 25 | 19 | 44 |
| 9 | 20 | 7 | 27 | 48 | 12 | 11 | 23 |
| 10 | 19 | 1 | 20 | 49 | 17 | 10 | 27 |
| 11 | 14 | 10 | 24 | 50 | 11 | 13 | 24 |
| 12 | 21 | 7 | 28 | 51 | 12 | 16 | 28 |
| 13 | 19 | 11 | 30 | 52 | 18 | 13 | 31 |
| 14 | 19 | 11 | 30 | 53 | 8 | 13 | 21 |
| 昭和元年 | 20 | 17 | 37 | 54 | 8 | 11 | 19 |
| 2 | 18 | 14 | 32 | 55 | 8 | 9 | 17 |
| 3 | 19 | 18 | 37 | 56 | 10 | 7 | 17 |
| 4 | 22 | 19 | 41 | 57 | 15 | 4 | 19 |
| 5 | 23 | 12 | 35 | 58 | 7 | 10 | 17 |
| 6 | 15 | 14 | 29 | 59 | 9 | 7 | 16 |
| 7 | 22 | 11 | 33 | 60 | 7 | 3 | 10 |
| 8 | 13 | 10 | 23 | 61 | 11 | 9 | 20 |
| 9 | 23 | 23 | 46 | 62 | 4 | 1 | 5 |
| 10 | 19 | 12 | 31 | 63 | 5 | 8 | 13 |
| 11 | 26 | 15 | 41 | 平成元年 | 7 | 5 | 12 |
| 12 | 30 | 19 | 49 | 2 | 8 | 5 | 13 |
| 13 | 18 | 16 | 34 | 3 | 7 | 3 | 10 |
| 14 | 24 | 15 | 39 | 4 | 8 | 8 | 16 |
| 15 | 21 | 28 | 49 | 5 | 9 | 3 | 12 |
| 16 | 17 | 19 | 36 | 6 | 6 | 3 | 9 |
| 17 | 21 | 28 | 49 | 7 | 5 | 6 | 11 |
| 18 | 30 | 21 | 51 | 8 | 3 | 5 | 8 |
| 19 | 21 | 37 | 58 | 9 | 7 | 5 | 12 |
| 20 | 24 | 25 | 49 | 10 | 2 | 6 | 8 |
| 21 | 27 | 25 | 52 | | | | |
| 22 | 新学制切り替えのため入会なし | | | | | | |
| 23 | 28 | 28 | 56 | | | | |
| 24 | 22 | 31 | 53 | | | | |
| 25 | 27 | 22 | 49 | | | | |

出所: 『七浦小学校同窓会』(1999)



4.3 七浦地区独特の遊び

また、M₂さんから七浦地区特有だと思われる「軍艦艦長」という遊びについて聞いた。軍艦艦長は主に男の子の間で行われ、ルールは、2チームに分かれチームごとに「艦長」から「水平」の階級に分かれ、その階級ごとに相手チームを捕まえることのできる階級が分かれる、といった鬼ごっこのようなものであった（例：艦長が一番偉く、どの階級も捕まえることができ、水平は艦長だけを捕まえることができる）。この遊びは、だれがどの階級で、誰を捕まえることができるのか覚えるのが大変だったとM₂さんは述べていた。また、この遊びは、M₂さんのひとつ上の世代で盛んだったらしく、60歳代後半から70歳代の方々の子供の頃にさかんだったことが分かった。この遊びで艦長や水平などの名前が使われたことは、七浦地区が海に近いことにも起因しているのではないかと考えられる。

4.4 竹のスキー

夏は海で遊ぶことが多かったが、冬は手作りの竹スキー・ソリで遊ぶことが七浦地区の子供たち（主に男の子）にとって定番だったようだ。この竹スキーについて、M₃さん（皆月、男性、70歳代）は、子供の頃、10月になると材料となる竹を山に行き行って鉋で刈って、その竹を細かく切って紐でくくりつけ、足を置くためのつかえを作り、先端は火であぶってへりを作って、その先端には手で持つための紐を通す、という工程で竹スキーを作っていたようだ。そして、雪が積もれば、友達みんな雪を踏み固めてつるつるにしてその上を完成した竹スキーで滑った。

4.5 竹鉄砲

竹鉄砲もまた、男の子たちにとって定番の遊びであった。遊び道具は自分で作るものだったらしく、この作り方についてはIさん（中谷地、男性、60歳代後半）が詳しく教えてくれた。まず、材料となる竹は前述の竹スキー同様、自分でとってくる。鉄砲の弾は、緑色の木の実を使っていた。Iさんは、この実がなる木を「ヨノミ」と呼んでいた。正式には、榎だそうだ。ヨノミがないときは、紙を丸めて弾の代わりにしたという。

4.6 海での遊び

七浦地区に住む子供たちにとって海は身近な存在であり、夏になれば格好の遊び場であったことが聞きとりでもよくうかがえた。このことについてもIさんに語ってもらった。海といえば、何かを採る、ことを目的としたそうで、サザエ・タコ・天草・アワビなどを採ったそうだ。特にあわびは採るのが難しかったらしい。採ったものはその場で直射日光で焼いて食べたそうだ。

また、Sさん（皆月、男性、60歳代後半）は、海で採ってきたものを、火をつけて焼いて食べたそうだ。これは女の子も一緒にしていたという。また、Sさんは、麦わらを束ねたものをあつめて、いかだにして海に浮かべて乗っていたという。

4.7 女の子の遊び

女の子も男の子と一緒に海で遊んだり、竹スキー、竹そりをしていた。女の子の特有

の遊びといえば、おてだま、おはじき、おままごとなどが聞きとりでうかがえた。これらについて T さん（皆月、女性、60 歳代前半）が詳しく教えてくれた。まず、おはじきだが、おはじきには浜辺で採ってきた綺麗な石を使っていたという。また、おままごとでは、食べることのできる草を使用していた。具体的な草の名称は、「イタドリ」と「スイコウ」だったという。これらの草はそのまま食べると酸っぱかったそうだ。

5. 昔の子供の暮らし

前節では、「遊び」に焦点を当てて述べてきたが、この節では、かつての七浦地区の子供達の暮らしの全般について、聞きとりをもとに述べていく。

5.1 登下校

「冬や風が強い日は泣きながら登校したなあ」と I さんは言った。I さんの住む中谷地から、七浦小学校までは徒歩で 20～25 分かかり、小学校は絶対徒歩で行かねばならず、自転車は禁止だったという。一方中学校は自転車通学だった。I さんはまだいいほうで、薄野や吉浦に住む子供はもっと遠く、登下校に 1 時間かかったそうだ。だが、冬になると吉浦に分校ができた。このことについては、R さん（皆月、男性、70 代後半）が詳しく教えて下さった。R さんによると、1963 年には 12 月～3 月の冬の間だけ、吉浦に分校ができ、この分校に通うのは小学校 1 年生～4 年生の低学年だったという。だがこの分校の制度は、七浦小学校がなくなる前にはもうなくなっていたという。

5.2 お手伝い

中谷地に住む I さんからは、中谷地特有だと思われる子供のお手伝いについての話がうかがえた。中谷地では、田んぼ作業に牛を使って代掻きをさせており、その牛は家では飼っておらず、山の上にある牧場で飼育されていたそうだ。そして、その牛を夕方に迎えに行くのが中谷地に住む子供達の仕事だったという。どの家にも牛がいたため、牛を山の牧場につれていけば、そこで近所の友達が集合し遊んでいたという。だが、I さんが中学生の頃、牧場はなくなったそうだ。一方、吉浦では、一軒ずつ牛を所有しており、山まで牛をつれてくる必要などはなかった。また、皆月には、牛はあまりいなかったそうだ。

皆月に住む S さんの子供の頃のお手伝いといえば、家族が刈ってきた稲を干すことや、水汲み、じゃがいもを運ぶことなどだったという。また、吉浦に住む N さん（吉浦、男性、60 歳代後半）は葉タバコを作る過程の吊りこみ作業の手伝いをしていたという。

6. 現在の子供の暮らし

昔の子供の暮らしを見た上で、現在の子供の暮らしについても記していきたい。主に聞きとりをもとに述べていく。

6.1 通学状況¹

通学・学校の面では、5歳と1歳のお子さんは車で15分ほどの輪島市立くしひ保育所に通っており、小学校2年生のお子さんは門前東小学校に通っている。門前東小学校は全校生徒70人ほどで、2年生は17人だそうだ。一方で、門前西小学校は全校生徒30人程度で、2つの学年が一緒になって授業をしているという。また、小学校からはスクールバスが出ており、山道を通って30分ほどかけて学校に到着する。学童に通っている子も多く、山道でバスから降りる子が学童に通っている時は、新しくできたトンネルを使ってスクールバスで帰ってくるそうだ。トンネルの道だと小学校まで15分程だという。また、スクールバスは七浦地区で5人の子供を乗せている。

6.2 子供教室

子供教室とは、毎年秋と冬に行われている七浦地区の子供達を集めて行っているイベント行事である。今年（2017年）から秋にはハロウィンパーティー、冬にはクリスマスパーティーという形がとられるようになった。今年のクリスマスパーティーは12月16日土曜日に行われ、筆者も参加させていただいた。時間は、午前10時から午後3時頃までで、場所は七浦公民館であった。内容は、ケーキのデコレーションを子供達でし、クリスマスらしいスノードームを作り、宝探しをする、といったものであった。参加者は、七浦地区に住む保育園～小学校までの子供達で、その日の参加者は、男の子5人、女の子3人であった。そこには、子供会会長であるKさん（皆月、女性、40歳代）も参加しており、お話がうかがえた。子供会会長は、小学校6年生の子供を持つ親が担うそうだ。また、七浦地区には現在、保育園～小学校の子供は全員で10人いるが、この日は保育園の子供2人が不参加であった。毎年七浦地区の子供の人数は減っているとKさんはおっしゃった。たしかに人数は8人と少ないが、この日の子供会は子供達の元気な声であふれていた。

7. 考察

今回、七浦地区での子供の暮らしや学校の統廃合など、子供に焦点を当てて七浦地区を見てきた。まず、遊びという面からみると、かつての七浦地区の子供達は、遊びは自分で生み出すものという考えの下、竹スキーや竹鉄砲など、なんでも自作で、工夫して作って遊んだ。また、それらの作り方は、近所の上の世代の子供から継承されていくものであった。そのような継承の中でも少しずつ変化はあり、例えば輪ころがしの輪が桶のたがから自転車の車輪の枠へと時代に合わせて子供達が工夫して、遊びを進化されていく姿も聞きとりからうかがえた。一方で、現在70歳代から60歳代の方々の間でなくなってしまった遊びもあった。それは「軍艦艦長」といった七浦地区特有だと考えら

¹ 現在の子供の通学状況について、聞きとりをもとにして記していく。このことについては、5歳と1歳と小学校2年生のお子さんがあるTさん（中谷地、男性、40歳代）とTさんの奥さんであるT₂さん（中谷地、女性、40歳代）から話がうかがえた。

れる遊びである。現在 60 歳代後半～70 歳代の方々の間では子供の頃盛んであったが、それ以降の子供達の間ではあまりされなかったという。軍艦艦長は戦争を思わせる要素のある遊びであり、戦時中、戦後などの時代・社会背景の流れとともにだんだんと馴染みのないものとなってゆき、消滅したのだと考える。遊びの消滅の年代がはっきりと確認できたのは軍艦艦長だけであったが、2 節で述べた遊びは今ではもうほとんど消滅している。正確な年代は確認できなかったが、70～60 歳代の方々のお子さんの世代ではもう行われていなかったという。その世代では、既成のおもちゃやゲーム、ファミコンなどの家庭用ゲーム機が登場しており、子供達の遊びは専らそちらに移行したのだと考えられる。また、3 節では、かつての七浦地区の子供達の暮らしぶりについて聞きとりをもとに記したが、現在では行われていないようなものばかりであった。このように、子供の暮らしは、社会背景や時代を映しているものだと考えられる。

学校の統廃合は子供の暮らしの変化の大きな転換点であったのと考ええる。学校の統廃合に関しては様々な反対意見があったものの、通学に関する問題など、現在では解決されている問題もあることが、聞きとりでもうかがえた。

七浦地区の子供の数はかつてと比べてめっきりと減ってしまったが、七浦地区の子供を集めて子供会を行っていることや、子供が地区から歓迎されていることなど、七浦地区をあげて、子供の健やかな成長を支えていることがうかがえた。現在とかつてでは、七浦地区の子供達の暮らしぶりは、社会背景や時代の流れとともに変化してしまったが、子供がのびのびと育つ、そのような環境は依然と変わらず、ずっと七浦地区に存在し続けているのだと考える。

8. おわりに

今回の実習では、門前町七浦地区の方々の人柄の暖かさをたくさん感じた。実習が始まる前は、初対面の相手である私たちに暮らしの様子や昔のことなどの話を聞かせてもらえるのだろうか、と不安であったが、どの方もたくさんのお話をしてくださり、とてもありがたかったとともに、そのお話も大変興味深く、調査実習を楽しんで行えた。調査に協力的な七浦地区の皆さんのおかげで、大変充実した調査実習になった。最後に、未熟な聞きとりにもかかわらず、暖かく迎え入れてくれた七浦地区の住民の皆様にご心より感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。